



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano © 1984 精道教育促進協会 (芦屋)三・三四五一 芦屋市船戸町12-6

教皇様の叢

愛と一致の霊

聖霊の御働き

1 「神の右手によって上げられ、御父から約束の聖霊を受け、それをお配りになりました。」使徒行録2・33(…)

今朝は、教会にとって聖霊降臨がどのような大切な意義をもつかにご注目なさいと思います。教会はその日正式に誕生し、世界中に進展する端緒が開かれました。聖霊をうけ、内的に生まれ変わった弟子たちは、すばらしい神のみわざの数々を宣言しはじめます。この聖霊のほとばしりは、のちに、聖霊降臨に伴う大音響に誘われて集まったあらゆる言語を話すあらゆる種族の人々にまでおよぶことになっていました。

つい先ほど、ペトロは、人々の求めに応じ、十字架に釘づけられた御方について話しました。それを聞いて聴衆は心からの痛悔の念にかられます。かつてピラトの面前で「十字架につけよ」と叫んだ人々は、聖霊によって魂を揺り動かされ、回心を決意したのです。「悔い改めなさい。」使徒行録2・38)というペトロの招きをきき入れ、三千人もの人が洗礼を受けました。

この素晴らしい回心の恩寵を眼前にして、キリストとの、また神との和解を人々の心の中で実現させてくださる御方の御力を信じます。使徒行録のことは借りれば、聖霊こそ「人々の心をうづ」御方であり、キリストに対する敵意を、キリストとそのみ教えへの信仰と愛に変える御方です。聖霊こそは、人びとを奮い立たせ、痛悔を促すペトロのことは素晴らしい実りをもたらした御方なのです。このようにして最初の回心を機会に、幾世紀を経てもとどまりを知らぬ流れが動き始めました。聖霊降臨の日人類再生の大事業をお始めになった聖霊は、そのとき以来、人々をキリストのもとへ立ち返らせてくださっています。人々に回心と罪の赦しを望む心をあたえ、神の友情を取り戻させてくださいます。

2 聖霊は心のなかで光のような働きをされ、それによって人は自らの罪をみとめます。人が自己の過ちに目を閉じている間、回心などは望めません。聖霊は良心を照らし、神のまなざしをそいで、罪人が犯した過ちに目をひらくよう助けてくださいます。それゆえ、

イエズスの死に賛成し、その処刑に荷担した人々は、突然聖霊の御光を受けて、自己の犯した恐るべき罪に気がついたのです。

そして聖霊は痛悔と告白へと導いてくださいますが、それだけではなく、キリストの犠牲のおかげでいつでも罪をゆるしてもらえることをも理解させてくださいます。誰でもゆるしを受けることができます。ペトロの説教を聞いた人々はたずねました。「兄弟たちよ、私たちはどうすればよいのですか。」「どのようにして罪の状態から抜け出すことができるのですか。」もし赦しの道が閉ざされているとすれば、赦しは全く不可能です。しかし、その道はたしかにあります。ただそれを利用しさえすればよいのです。聖霊は赦しを与える神の愛と、救い主が成就された贖いのみわざの力を信頼するよう助けてくださいます。

聖霊のとりなしの御働きには、もう一つ見逃し得ない面があります。聖霊は、聖霊降臨の日、人間同志を和解させることもお始めになりました。実際、聖霊降臨のとき、天下のあらゆる国から来た敬虔な人々(使徒行録2・5)がつどいました。こうして、同じ信仰のもとに全ての国を集めるご意向を明らかにし、救いの使信が理解できるように心を開いてくださったのでした。

特に、言語の壁を越えて、異なる人々をお集めになり、神の偉大さを宣言する弟子たちの証言をそれぞれが母国語で聞けるようになさいました。(使徒行録2・8参照) 言語の違いが障害となって、キリストの使信に耳を傾けることができないうことのないよう、聖霊は、福音をそれぞれの心にしみとおらせてくださったのです。

聖霊降臨以来、諸国の民の和解は遠い未来の夢ではなくになりました。それは現実となり、教会が世界中に広がるにつれて、成長してゆきます。聖霊、それは愛と一致の霊であり、

贖いの犠牲が目指すこと、つまり、離れ離れになった神の子らを再び結びつけてくださる御方です。

3 この一致をもたらすみ業には二つの面があります。人々をキリストと一致させ、一つの体、つまり教会に結びつけること、そして、地理的文化的に非常に異なる人々を同じ友情で結び合わせることです。聖霊は、教会を絶え間ない一致と和解実現の中心となさいました。さらに、聖霊の和解の御働きは教会外の人びとにもおよびます。そして、あらゆる国家の人々が一致を望み、世界を分裂に追い込む種々の紛争を克服するよう導いてくださいます。

最後に、聖霊による和解は、人々の母である聖母マリアの協力のもとに成就されること

□聖霊は心のなかで光のような働きをされます。良心を照らし、神の眼差しをそいで罪人が、犯した過ちに目を開くよう助けてくださるのです。

を考えて終わりにしたいと思います。教会のあけぼのにおいて、聖母は、十二使徒や初代の弟子たちと心を一つにして祈りつつ、聖霊の賜の豊かな流れを受け入れる準備に協力なさいました。そしてきょうも人々のため、聖霊に協力しておられます。聖母マリアは、母としての愛で導き、人類全体と各人に向かって一致を呼びかけておられます。御母マリアの深く切なる望みをささえる聖霊によって、人びとが愛と一致への母らしい招きを受け入れることのできますように。

修道者のための〈使徒教令〉

自らを神に捧げる

贖いのご計画と福音的勧告

誓願をたてると、みなさん方一人ひとりの前に、福音の勧告という道が開けてきます。福音の教えの中には、「必須のことから」ではなく、「より良いことから」、つまり旋以上を強く要求する勧めがあります。たとえば、「裁いてはならない」(マテオ7・1参照)、「何も当てにしないで貸してやりなさい」(ルカ6・35)、「隣人の要求や望みに応えてやりなさい」(マテオ5・40参照)、「貧しい人たちを食

1 「そのパンを食べ、そのさかずきを飲む」とにおのの自分を調べなければならぬ。(…)「聖体の秘跡には罪を赦す力があります。」「典礼は教会の活動が目指す頂点であり、同時に教会のあらゆる力が流れ出る泉である。」「典礼憲章」10」ところで、その典礼の頂点とは問われれば、それは聖体祭儀であると言えなければなりません。この秘跡中、主イエズスは「罪のゆるし」(マテオ26・28参照)のために、私たちのかわりに私たちと一致して、ふたたび従順と奉獻の犠牲を御父にささげてくださいます。

2 トリエント公会議によると、「ご聖体の秘跡は日々犯す過失と大罪から解き放つてくれる解毒剤である」と教えています。同公会議は「ご聖体は重大な罪を赦してはくれるが、その赦しが実現するには恩寵と償いのたまものが必要とする」とも教えています。ところで、ここでいう恩寵と償いとは、少なくとも意向の上で、告解の秘跡を前提としているのです。犠牲と

事に招いてあげなさい」(ルカ12・13参照)、「つねに赦してやりなさい」(マテオ6・14参照)、「その他、このように風を。聖伝に従い、福音的勧告を守る誓願が、貞潔、清貧、従順の三点に集中されているのは、それらが贖いのご計画全体の中心点、ある意味で要約、であることを、明らかに強調しているからです。福音の教えに含まれる勧めはすべて、キリストが「従いなさい」とお呼びになる道のプログラムに、間接的ではあっても、組み入れられます。しかし、貞潔、清貧、従順の三つは、この道にキリスト中心の性格を与え、また贖いのご計画という印を刻み込みます。贖いのご計画にとって、人間の心の中から、つまり内側から、宇宙全体を変えるということが欠

してのご聖体の秘跡は、赦しの秘跡と同じなのでも告解のかわりをするわけでもない。ご聖体とは、すべての秘跡に向かわせる力の泉であり、すべての秘跡が向かう目的であり、すなわち赦しの秘跡こそご聖体を目指すと言えます。赦しの秘跡に与れば、重大な罪も赦してただけです。そのため告白が要求されているからです。



「人間の贖い主」20番で私が触れた点について、トリエントの公会議も同じく、次のように主張しています。特殊な場合、実はそのように望まねばなりません。赦しの秘跡を受けたいと望まねばなりません。とにか特別の場合を除いて、大罪のあるときには、必ずご聖体を拝領する前に、赦しの秘跡に与らなければなりません。

3 冒頭の聖パウロの言葉について次のよう

くことのできない重要な点になります。「全被造物は切なるあこがれをもって神の子らの現われを待っている。…腐敗の奴隷から解放されて、神の子らの光栄の自由にあずかることを希望している。」(ローマ8・19参照)このような変容は、キリストが一人ひとりに呼びかけ、心の奥に注ぎ込んでくださる愛、つまり、奉獻の本質そのものをなす愛、と手に手を携えて実現します。ところで、奉獻とは、洗礼という秘跡的奉獻を基に、誓願をたて、みずからを神にささげることです。聖ヨハネの第一書簡を読めば、何が贖いのご計画の基礎であるかを知ることができます。「世と世にあるものを愛するな。世を愛するならば、御父の愛はその人になく。世にあるもの、すなわち肉の欲、目の欲、生活のおごりなどは

に書いたことがあります。「使徒の言葉は少なくとも聖体と悔悛との間の密接な関係を明らかにしている。キリストの最初の教えが、「悔い改めて福音を信ぜよ」であるならば、愛と十字架と復活の秘義は悔い改めての招きを強調すると考えられる。聖体と悔悛とは福音に従う真のキリスト教的な生活の、分かち得ない二面である。聖体の宴に招くキリストは、「悔い改めて」と招くキリストでもある。日々新たな改心への努力がなければ、(…)聖体の効果が得られないか、弱められるか、いずれにせよ、(…)心の準備のできていないことは明らかである。」(『人間の贖い主』20番)

昨今ひんぱんにご聖体に近づく人が多いと聞いてまことにうれしい限りですが、同時に信仰と愛徳の面でも成長があればと望んでいます。また、聖パウロの警告を無視するわけにもゆきません。「主の御体をわきまえずに飲食する者は自分自身への裁きを飲食する。大罪があれば赦しを受け、清い心でご聖体に近づくと、教えているからです。(一九八四・四・十八 一般謁見)

すべて御父からであるのではなく世からである。世と世の欲は過ぎ去るが、神のみ旨を行なう者は永遠にとどまる。」(ヨハネ12・15参照)修道者やシスターのみなさん、誓願によってみなさんの心のなかに御父の愛を受けます。それは、世の贖い主イエズス・キリストの聖心に宿る愛なのです。御父からうけるのは、世と世にあるすべてを包容する愛です。それはまた同時に、「御父から出ない」ものすべてを克服する愛でもあります。従って、それは三つの欲を征服する愛なのです。「肉の欲、目の欲、生活のおごり」は人間のなかに隠れている原罪の遺産であって、その結果、神がお造りになり人間の支配に任された世界(創世の書1・28参照)と人間との、心の中の正常な関係がさまざまなかたちで損われてしまいました。福音の勧告は、贖いのご計画のなかに

「世界」との関係は人の心のなかで変えるために根本的に重要な手段です。(…)聖ヨハネの第一書簡の言葉に照らして考えてみると、福音の三勧告が贖いのご計画全体の中でいかに大切な要素であるかが比較的容易にわかります。内的生活のなかで、福音的貞潔は肉の欲からすべてを変え、福音的清貧は目の欲からすべてを変え、また福音的従順は心のおごりが源となって人の心のなかに生じるすべてを、根本的に変えてくれます。ここではわざと「克服する」ということを、変える、と表現してきました。というのも、贖いのご計画全体が御父への「司祭的祈り」と称される言葉の枠に挿入されているからです。「わが祈るは彼らを世より取り去り給えとにあらず、彼らを守りて悪をのがれしめ給えとなり。」(ヨハネ17・15) 福音的勧告の根本的な狙いは「被造界の刷新」です。勧告のおかげで、「世」は人間に隷属するものとして与えられていますが、それは人間が自身自身を余すところなく神にささげるためなのです。(一九八四・三・二十五)

す

説教・講話・書簡等の抄記

私たちと共にいます神

1 「私があなたたちに伝えたことは主から授かったことである。」(コリント①11・23)

この聖パウロの証言は、他の使徒たちの証言でもありません。使徒たちは受けたことを伝えてきましたが、その後継者たちもまた同様に、授かったものを幾世紀にも渡り世代から世代へと、途絶えることなく今日まで正確に伝えてくれました。

ローマ教会の様々な人々が祈りのうちに集っているこの夕べ、感動を抑えられぬ雰囲気の中に包まれながら、ペトロの後継者である私は、聖パウロのこの証言を忠実に繰り返したいと思ひます。「私があなたたちに伝えたことは主から授かったことである」と。

使徒たちが伝えてきたことは、キリストご自身と、キリストのご命令、すなわち最後の晩さんで、「これはあなたたちのための私の体である。」(コリント①11・24)とおおせられたキリストの言葉と動作を繰り返して行ない伝えよという命令です。

2 二千年近く受け継がれてきた伝統の一端として、私たちもきょう、「パンを割きます。」という言葉では表わしきれないあの夕べの出来事を、一九五〇年経たこんにも繰り返しているのです。あのとき神は私たちの傍らに在まし、ほとんど信じ難い愛、限りない愛をお示しくださいました。

「これはあなたたちのための私の体である。」「あなたたち」とおおせになったとき、キリストは私たち一人ひとりのことを指しておられました。私たち一人ひとりのために、死に至るまでご自身を捧げようと望まれたのです。

このことを考えると深い感銘にとらわれずにはいられません。

私たちのために「御体を与えてくださった。」これは、歴史書の冷たいページに書き留められた遠い昔の出来事ではなく、いまま祭壇上で、血は流れないけれども、御体と御血の秘跡において行なわれている現実であると思つと、さらに強く心を打たれます。キリストは今、ふたたび御体と御血を与えてくださいます。そしてみじめな状態にいる私たち罪人に、神の慈愛をそそぎ、罪の汚れを取り除き、永遠の生命の種を、もろく死すべき肉体のうちにまいてくださいます。

3 「主はおおせられる、私は天からくだつた生きるパン、このパンを食べる者は永遠に生きる。」永遠に生きたいと望まない人がいるでしょうか。不死は、すべての人の心に脈打つ最大の望みではないでしょうか。しかし、残念ながらそれがかなわぬ望みであることは日々の体験が教える歴然たる事実であるとも言わねばなりません。

なぜでしょう。答えは聖書に記されてあります。「罪が世に入り、また罪によって死が世に入った。」(ローマ5・12)からです。それではもはや望みはないのでしょうか。罪に支配されている限り、希望はありません。しかし、ひとたび罪が打ち破られれば希望は再び生まれてきます。実にこれこそ、キリストがあがなひのみわざによってもたらしてくださった恵みなのです。聖書にはこう書かれています。

「一人の人間の罪のため、死がその一人を通して支配したとすれば、なおさらのこと、神の恩寵と人を義とするたまものとをゆたかに受ける人々は、一人のイエズス・キリストを通して生きて、支配することになる。」(ローマ5・17)

「一人の人間の罪のため、死がその一人を通して支配したとすれば、なおさらのこと、神の恩寵と人を義とするたまものとをゆたかに受ける人々は、一人のイエズス・キリストを通して生きて、支配することになる。」(ローマ5・17)

イエズスが、「このパンを食べる人は永遠に生きる」とおおせられるのはまさにこの理由からです。パンの外観のもとに、罪と死に打ち勝つた御方、よみがえられた御方、すなわちイエズスご自身が現存しておられるのです。神のお与えになる食物を糧とするなら、この世に生きる間、悪の挑発にうち勝つ力を得るだけではなく、死に対する決定的勝利をも約束されたこととなります。「最後の敵として倒されるのは死である。」(コリント①15・26)と聖パウロは言っています。こうして神は、「すべてにおいてすべて。」(ローマ5・28)となつてくださいます。

4 聖体の秘義を深く考えてみると、計り知れぬほど貴重なこの宝を、教会が嫉妬深いとも言えそうな愛で守ってきた理由がよくわかります。キリスト信者は長い歴史を通して、この偉大な贈り物が与えられたことへの喜びと感謝を外面的にも表わす必要を感じてきました。それが、それも当然と思われまふ。たとえ、どれほど広大で、どれほど芸術的にすぐれた聖堂であっても、神の秘義への賛美をその聖堂内にとめおくことはできず、世界中の町々へと運んで行かねばならないと気づいたのでした。これわやすいホスチアの外観のもと、隠れておいでになる主は「世の命。」(ヨハネ6・51)となるために来られたのですから。

こうして、聖体行列が行なわれるようになり、教会は長いあいだ格別のよろこびにあふれて、特に荘厳にこれを挙行してきました。私たちが間もなく町へくりだします。歌

い祈りながら御体と御血の秘跡につき従い、家々、学校、仕事場、商店へと入ってゆきます。人々の命が燃えあがるところ、情熱の沸きでるところ、人々が衝突するところ、苦しみのあるところ、希望が花と咲くところへと、進んで行きます。この小さなホスチアのうちに、はなはだやっかいな問題にも答え、激しい苦痛をもちやし、人々が知らず知らずのうちに抱いている幸せと愛への渇きをうるおす力があることを、喜びいさんで証言するために、共にいます神

町の中を、毎日様々な問題に悩む人々の中を、行列は進みます。兄弟姉妹たちに出会い、全ての人にキリストの現存なさる秘跡を示すために進んでゆきます。

天使のパン、巡礼者のパン、子供たちの真実のパンを見よ！
働いて得るパンをごらんください。パンなしには人は生きることも力を保つこともできません。そのパンが、私たちを救ってください。神の愛情のこもった現存を示す、活き活きとした真実の証となりました。このパンの外観のもとに、全能・永遠なる神は私たちのすぐそばにおいでになっています。「私たちと共にいます神」、エンマヌエルとなられたのです。このパンを食べる人にはみな永遠の生命が約束されています。

本日の典礼聖歌にあらわれた素晴らしい感動が、町々で出会う人々の胸の中で花ひらくよう、心をこめて祈りましょう。

「善き牧者、真実のパン、イエズス、われらをおわれみたまえ。われらをやしなない守りたまえ。命の国の永遠なる善へと導きたまえ。御身はすべてを存じて、おできにならないことはありません。地上でわれらをやしなない、天国での諸聖人の喜びの食卓に御身の兄弟たちを導きたまえ。」アーメン。

(聖体行列前の説教 六・二)

不変の教え



信仰は世に勝つ勝利(II)

時に死は、すべてを破壊する力として訪れます。(…) 現世における人間の悲劇のもとに死なのです。

そうすると、現世は人間の存在をはかる受当なものさしにはなりません。人間は現世から離れています。現世、目に見えるこの世界は、人間をその表面から投げ捨てます。「現世は人間に勝った」と言えましょう。人間は全く現世に属するものである、このことが本当だとすれば、現世は死によって人間を完全に支配し、人間に対して勝利を得ることになります。こうしてみると、人間が「世の中に自らの場をすえる」ことは、単にそれだけに終わる問題なのでしょうが。

絶え間ない挑戦

福音史家使徒聖ヨハネは「世に勝つ勝利はすなわち私たちの信仰である」(ヨハネ①5・4)と記して、人間は神に属しているのだから、決して現世に属してはいるのではないことを確認しています。イエズス・キリストの復活はこの人間についての根本的な真理を裏づけました。人間の超越性とは何であるかを知らなければならない、イエズスは死去し、復活せねばならなかったのです。そこで人間は、自己の本質をすっかり与えつくしてしまうことなく、「世の中を秩序立て」ねばならず、「世の中に場をすえる」こともでき、またそうする義務のあることをも理解します。自分を現世にゆだねてはなりません。人間がみずからをまかせてよいのは神だけです、ちょうどイエズス・キリストがそうなされたように。

キリストの死と復活は、人間の本质と人間性に対する絶え間ない挑戦です。それはまた、現世との関係、現世での生き方に対する挑戦でもあります。

親愛なる兄弟姉妹のみなさん、あなたがたはどのような生き方をしておられますか。私たちはみな、どのような生き方をしているのでしょうか。私たちの人生の水平線にあるのは「この世に場をすえる」望みだけなのではないか。私たちは人間の本质を、すっかり現世に与えてしまっているのではないのでしょうか。キリストの死は、その復活と共に、挑戦であり、同時に呼びかけでもあります。ここに「世に勝つ勝利」があるのです。

すばらしい現実

キリスト教は「博物館の陳列品」ではありません。(…) そのようなことでは決してありません！

キリスト教とはすばらしい現実です。人間のもつ問題に、絶えず関係し、人々が避ける問題に必ず触れる現実なのです。目下の進歩を主張する思想は、決まってこの現実を回避しようとしています。

イエズス・キリストはご自分の死と復活によって、たえず、「世に勝つ勝利」の問題を人間につきつけられます。そこで人間はいずれかを選択せねばなりません。この世での生を終えて世の終わりの時に、勝利者となるか、あるいは現世に征服されるか。(…)

立派な系図

「イエズスがキリストであることを信じる人は神から生まれたものである」(ヨハネ①5・1) 人間は立派な系図をもっています。その系図をキリストは福音で再確認し、「ご死去とご復活によって保証してくださいました。人間には立派な系図がありますから、その名においても自己の本質を現世に引き渡すことはできません。人間はみずからの中に抱いている神の似姿を、単なる「宇宙の事柄」に委せるわけにはゆかないのです。

人間には立派な系図があり、それを毎年、とくにキリストの過ぎ越しの秘儀を祝うときに祝います。この系図の名において、「生んだお方を愛する人々は、また神から生まれた者をも愛する」(ヨハネ①5・1)

本当にそのとおりと言えるのでしょうか。私たちは神から生まれた人を愛していますか。母の胎内に宿った人を本当に愛しているのでしょうか。

愛によるあかし

本日の典礼の中で、よみがえられたキリストの目撃者として語っているのは外ならぬヨハネです。ヨハネはこう言っています、「神を愛してその掟を行えば、それによって私たちが神の子らと愛していることがわかる。神への愛はその掟を守ることにあるが、その掟は難しいものではない」(ヨハネ①5・2-3)

このようにキリストの復活の証人であるヨハネは書いています。復活は愛を証明し、復活の証明は愛によって、神への愛と人間への愛によって、成しとげられるのです。

この世を征服する勝利は、すなわち愛によって得られます。まことに信仰は愛に通じ、愛ゆえに生きるのです。愛のおかげで、信仰は霊の息吹きを呼吸します。「それを証明するのは霊である。霊は真理だからである」(ヨハネ①5・7)

愛は、文化という建物の中で、人間が真の

尊厳を保って住んでいる現世という建物の中で、ゆるぎない力を有しています。世に勝つ勝利は同時に現世に関心をもっているのです。生活が一層人間にふさわしいものとなるような「よりよい」現実を望みます。(…)

よろこべ、たのしめ！

(…)本日、ペトロの後継者である私は、ご復活後八日目をみなさん方とともに祝っています。

詩篇作者と心を合わせ、次の言葉を歌います。「家づくりが見捨てた石が、すみの親石となった。それは主がととのえられた日、われらはそれをよろこびたのしもつ」(詩篇117・22-24)

角の親石とは、十字架につけられ、よみがえられたキリストのこと。Pascha nostrum! さてそこで、私たちは自らに問いかけます。みなさん方一人ひとり、自分自身に問いかけてみてください。「私たちは世を秩序立て、自己の人間生活の場をこの世にすえている」だろうか。私たちはこの角の親石の上に建てているのでしょうか、それとも、この角の親石を見捨てているのでしょうか。

かつて、きょうと同じご復活後八日目の夕がた、使徒たち全員が集まっていた高間にふたたび姿を現わされたキリストは、トマにおおせになりました。「信じない者ではなく、信じる者になるように」。

「わが主、わが神」(ヨハネ20・28)とトマは答える。

この瞬間から、キリストは、トマの生涯の角の親石となりました。

キリストがトマにおおせられたお言葉が、私たち一人ひとりの中に成就されますように。「私を見ずに信じる人は幸いである」(ヨハネ20・29) みなさん方全員が、「信じてそのみ名によって生命を得」(同20・31) ることのできますように。アーメン。(四・十八)

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部六十円送料六十円 一年予約七百一十円送料七百二十円 二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393